朝夷巡嶋記　第四編　巻之

春

庫 105 / 5 / 55 / 169
號番 186
冊數 40

へ13
3093
17

吉田屋

朝夷巡嶋記全傳第四編巻之二

東都　曲亭主人編輯

中輯第二十三

城を拔せて義士の功　魔と禳ふ良將の弓

撫大將光仲ハ廣綱と共ホ城ニ入りて彼此を展換して更ホ士卒の部署
前後の城門氏固さを再て城戸四郎武詮水草太郎五昌之ホ紙尾ら
その軍力を褒賞す。さていつのころ。御邊ホハ尚弱冠ホして且その徒三
十名ホ過ぎ暴道時夏二隊の賊軍城より遠く推出さる城中どうち
戍る賊兵も亦野ちくんよりホ形る謀をなく速ホ乘取ん。その支の爲体
詳ホ告ふ。といふまく両人辞ぞなく。この義ハちん尋ねとやることどもくや
上ん。といひひつれど鄙ニ支のいそぐ。さホ且く默止ゆ。抑前月上旬

昭和九年七月二三日　購求

へ13
3093
17

賊將猛虎時夏ホ圓山の舘を攻破られしに吉見冠者を擒ホ
せられ主ゆくゑ信夫莊司ハさらえ某ホが父兄なる水草十郎昌甫城
戸二郎守詮ハ神井鬼六猛虎が為ヨ殺ゑ剩笹姫ホ俱しくうし。
某ホが母嫂鳥江嬰竹も亦蘇塗暴道ホと血戰しく途ヨ命を隕
せしが姫ヲ賊ヨ捉られ。されば義を重し。恥を知る家臣ホも
大ぐさ殺ぞ戰殁しく。磐井玉造の両郡ハ墓なく賊ヨ奪れぬ。この
時某ホハ百餘騎の兵と共ヨ遠く正方寺の枝城を守りてゆしくば。
竟ヨ君父の先途ホ沒あんぞ圓山の舘の没落その夜半ホ攻入て程ヨ。
雜兵ホ々さえや落亡く残るハ僅三十名必死と定めうどもかぞへの
寡兵をもて勝誇る賊軍ヨ撃向ひて卵を以て石と壓ヨ異なるぞ。時代
俟賊と擊て君父の讐を復さんぬ。といひ久しくその曉ホ枝城と
距れ離散しく。ちのく近郷ホ跡を埋め志のびくホ平泉の形勢を張ふヨ。
義邦ぬしを芭姫も獵場の雉の羽と傷ゑ猶存命ゑ。とうち
ぬく泣ホ憑しく。いつで賊柵ホ潛入く救ひとらんといふのゑ賊も
亦用心日夜隙なふ塀ハ高く。塹ハ深し。天飛ぶ鳥ホあらざれば便なゑ
身をうち歎く。折しもあれ鎌倉より云その両大將。ゆくび經任誅伐の
為既ヨ下向の由なり。數百の軍兵陸續しくえや當國ホうち入
ぬる。六角牛山ヨ屯ちと風聞定なりければ。いつで御陣へ推參して巨細ヨ
宿志を告ちし。先鋒ヨ加へく。日来の鬱憤を散さんとゆふのゑホく
功もなく。豫ヨ名をぞ惜ゑねば。間者ホハあらざりやと疑ふ。その甲斐
なし。せめく賊兵一人なりとも擊とらく首引提そを見參の家畏ユしく。
志を遂んもとゆふけばさのちり。同志の徒ホ謀し合し。僉さまく

姿を変じ。この鎮守府の古城の邊ちく徘徊し。敵の出入を跟寇ひ。曩ふ賊将暴道時夏数百騎を二隊ふ分ちて前後の城門ちく。六角牛山のうえ推行ぬ。とのこの隙ふ乗じ攻めば城を拔ぐべしと。

とあらぐと心頻ふ逸やしーくども。躬方ハ終三十名賊ハ大ぐ城ふ出ぐ。今そ防り守るとあ。ゆうくんと出ぐどもとも。百騎ゆハ多くべし。白昏乃戦ひ便宜よあらぐと思ひ久しく且く退ぬ泉川のこのころ樹蔭ふ集りく日の暮るを俟ふ黄昏ちくなる隨ふ平泉のうえ上して一個の騎馬武者走り来ぬ。某ふ遥よ見ぐ。是ぐ。経任が使ふしく急を府城へ告ぐんと。

ちも猜しく竊ふ称び武詮ハ准備の半弓。ちく取ぐ指堅め矢比ちく。隨ふ引彈と飛箭ふ彼騎馬武者ハ肩を射ぬ馬ぐ撞と落る刈式昌之遥ぐ走り蒐ぐ取ぐ。嚴しく縛め姓名来由を責問ふ初ハ絶ぐ。ぐ終ふ苦痛ゑ堪ざりぐ。これハ修羅殿の使者ぬ。蛭富四九郎とふ。昨夕厨川ぬ兵粮庫故ぐ焼し躬方ゑ反忠のあや。と疑ふ人ちく左ふ右ゑ安ぐ。この支の趣を暴道時夏ふ疾告ぐ。その時ぐ修羅将軍の仰式受ぐ。府城へ赴くべと。渋く首伏ぐ。彼が鎧の引合を揚ぐ。一枚の契ぬ。又その故を責問ふ四九郎答ぐ。平泉厨川鎮守府の成へ入るぬ。躬方の大将ぐ。この契ぬ。城ふ入ぐ式許さ是ぐ。修羅公の軍令ぐ。ちも。生ぐ命ぐ。ハ

ぬ。とのふその辞ふ。ぐ。昌之ぐ関ぐ。刃の光ぬ共ふ四九郎ぐ首撃落し。軍神の血祭ゑ。ぐ。と祝しく。衆人勇むぐ。中ふ城戸武詮ハ商量ぐ。一味の義士ハヨヌかふ只一級の首を齎しく寄ぬ乃

義士暗ふ
経任が
使を生拘
富山九郎
本草太郎五

陣へ入るとも。させる賞美あるべきなれども。彼笛の音の聞の声もやあらんもなれども。物の音幽ふ笛也。ものの賊軍敗北せし欲ひきまれ合戦の最中とおぼえしと。呼詮如此この様式にて。鎮守府の城を攻落し。こまをヨ賀殿ヨ献らべ。豊ようぞや。と密語べ。衆皆えうぶべしと応じて。死骸の物の具を剥とれべ。城戸四郎ハこまを式鎧ふく。皿九郎が馬ふうち乗て。水草太郎五ホ廿九人ハ雑兵ヨ紛して。鎮守府の城ヨ赴く程ふ。黄昏ゆえ。ちやふるかくて四郎武詮ハ城門の邊ふ馬ヲ進めて。こまヨハ平泉こう。当城の加勢ようく。蛭富皿九郎仰式受軍兵を招き集れり。さて城門を開允と呼ば応と答て賊兵ホ角門を半ば開くつくと。遠ーヌ。平泉の加勢ようべ契あらん見せ。とのふ武詮ハ。ろ沼さ奪取る契をとき。昌之ヨ遣与ふるん昌之こまを式受ろて。守門の賊兵ホ示せしべ且ーく城門の内ようろ。ゆぎ入りぬと。ゆうけく門扉を左右ふ開く。ほどふ武詮ハ下馬をせど昌之ホ共侶ふ一人も遺らど衛と入りく。城門の内ふ聚合ろ。衆賊を矢庭ー砂仆せべ。ちやいのふと駿騨ぐを。ゆ不八方へ雑倒ーく。異口同音ふ声とろり立信夫荘司元晴が股肱腹心と呼ま。城戸三郎守詮が第。四郎武詮水草十郎昌甫が一子。太郎五昌之君父の怨を報ん為ふ追伐の大将ヨヌ賀殿の先鋒ヨ参加り。同志の義士ホと謀り合ーく。ろや当城を乗取ーろ命惜くハ降参せと呼ろ。名告うけて。縦横ヨ身ふ殺奔まべ。さろぬぐふ龍蛇茂林のごとく兵火飛ーく。矢叫鯨波漸こヨ近づ。賊軍敗北の兆ヨ。逃足踏ろ城中の賊兵ホハ某ホふ不意式撃まて。防ぐ術なきるのく。蟻子を散ごとく。八方へ逃走るを此ヨ追詰彼ヨ砂仆

只芋葉を苅るごく。四五十人を撃留く。生拘九人ホ及びしゝが残る
奴原痩弐員くも。塀を喻く逃るとそ。塹ヨ落石ヨ碎ル脱ゝめ柿
ゝ九射方ハ一個も傷損ゝく。忽地城を乗取ゝ。寄手の入来と俟
ホどホ果しく時夏暴道ホハ軍敗ゝくそゞ落武者二十騎だゝ。
甲夜ヨ城門の邊ヨ来ゝどゞ夜陰ゝれべ敵も敵ゞ只箭ヨ射ゝて
走しゝ後ホ失けゞ彼落武者ハ賊の大将鵜東二暴道太郎時夏
ゝゝしゝそゝ知らぎしく撃留ざゝし。迭憾ゆと武詮これを物ゝれば。
昌之句を続ゞ迭代ヨ演説を。光仲熟ゝら仕ゝく吁
智ゝゝかm邊ホ。齢ゝ少しく。忠孝の心いとふく。不思議の計
畧をめぐらしく。輙く城を攻落せしハ第一番の軍功ゝゞ。これ下野ヨ
在りしゝ。吉見冠者と刎頸の友ゝゝハ伝へも伝メゝ平泉の柵を
攻おとしく。冠者と笹姫を救ひとゝんと日を儚くく俟べゝのゝ忠勤と
励まゝ。聊當坐の賞ゝゝく鞍置ゝ名馬二匹を牽せ武詮日日
之ホホ是ゝ與へ九八人の義士ゆを大刀物具ホどもゞく禄を取せしゞ。
皆拜舞しけり。こゝ紙見聞く士卒ホハその計畧を感嘆し。且
その功名を羨ゝ。いゝ志をゝゞ励しけゝとゝく程ホ春の夜ゝまべ
短くく。東雲ゝゝく明しゞ。光仲ハ廣綱ヨ出ゝく城中の倉廩とひらく。
銭財巻絹の類をゞ功ある士卒ホ配分し。又賊の貯ゝる兵粮を過半
當郡ゝる百姓們ヨ頒取ゝしく。ゝ来賊乱の窮乏を賑し。法度と略
ゝく軍令を正しく。痩員と勦ゝ戦殺せし。雑兵の屍と求めて埋葬せ
ゝゝゞ慈善と宗とく。賞罰私ゝゝゞ士卒僉ゝゝく勇ゝ来日
来ホ十倍せり。かくその夜さり海老尾加世九ハ十個の雑兵を引て厨川

よりかゝる程に。光仲號りて對面して。這度の趣を密るに加世丸ハ豫ての計畧のまゝに。間晦厨川の柵に紛れ入りて。兵粮庫を焼きりし爲体を演説し。さらにその軍に克せしめて。剰この鎮守府の城をも獲させつるのなりし。路次の風聲定りあるべきものなく向て爭ひやしとて。その賀を述るにあり。光仲ハ加世丸が功を賞して十個の雜兵に賜禄を取らせけるさる程に。光仲廣綱両大將。龍蛇茂林の一戰に賊兵を鏖にして鎮守府の城を攻落せしより。彼此に伏れしが初ハ纔に應ぜざりし。當國の武士浮浪人ホ日にあまたせ集りて。その勢無慮千五百餘騎になりしかバ。既に破竹の勢ひありけれバ。この新隊をもて平泉を攻んとて光仲ハ出陣の分部を廣綱に相譚ふに。廣綱答て。當城ハ是賊地の吭なり。且我守るもの等閑にしがたし。不虞の失あらバ進て賊を數に由なし。只この城を守るべし。後よりて出陣したまへと。のたまひしかバ光仲然りとて再談に及ばず。廼間中守直と海老尾加世丸と五百餘名の士卒を留て廣綱に隷て府城を守らせ。城戸四郎武詮水草太郎五昌之を先鋒とし。佐味竺内下河邊小三郎を後陣に備させて一千餘騎以三隊にわけ。經任が楯籠る平泉の柵を望て進發させしが路傍なる百姓们ま老を扶け幼を抱きて。皆大將を拝み再度の勝軍をぞ念じける。案下某生再説。平泉の柵なる賊首修羅五郎經任ハ曩に鎮守府の僞將蘇塗暴道が注進を听て。去年足利義兼が大軍を将て寄せ来りし時さへ一ッ肩とせざりしに何ぞや此度ハ多賀光仲とやらんが僅に五百騎を将て。當國に討入り既に六角牛山に屯せしとて。ゆるがせにのみ思ひて暴道を智あり。

時夏ハ勇あり。鎮守府ゟ奴原を撃留んと疑ひ、両将いまく軍議を凝しく。たゞく勝軍を告よ〳〵と答遣しく。騒ぐく氣色ハうろ〳〵ふ次の日ハ又厨川の柵より。経任が偽将跖大吠又陰行とのゝ為ゟ馬の使をゟく。本柵數軒の兵粮庫おのづゝ火燃出く昨夕焼亡しく。ゟと告しく経任ゟく眉を顰め厨川ハこゞ根城ゟく輙く人ゟ往返を許さゞ敵ゟ間諜者ゟ〳〵こゝ難ゟんゟ今彼処ゟる兵粮庫故ゟ〳〵く焼亡せしハ躬方ゟ反忠の為ゟ欲ゟ亦ゟ為べくゝ疾このゟ式暴道ゟ報知しく変のまゝ式ゟ為ゟとく。賊将蛭富皿九郎とのゟの式鎮守府へぞ遣しける是ゟして経任ハ疑心竟ゟ輙ゟ式ゟく服心のゟのゟ〳〵ゟ編ゟ眼をつけしく賊の四頭領とのゟれゟる。神井鬼六猛虎鐵肴矢藤五重連珍浦五十五六方相ゟハゟゟ。

衆賊送ゟ心をあゟくいと安ゟゟぞゟひゟ。かくゟその日ハゟゟ暮て又時ゟんとゟる比ゟ蘇塗鶏東二暴道刀野太郎時夏ハ唯二騎ゟ討ゟゟゟく。數个所伐ゟを員ゟゟゟ。平泉の柵ゟ脱ゟゟゟ神井鬼六鐵ゟ矢藤五ゟゟ就く。敗軍のゟ式告ゟけゟゟ経任ゟ式変敢ゟ忙しく臥房をゟく。躯て暴道時夏を目前へ召ゟんく。ゟの顛末ゟ訊ゟ、件の二賊ハ拝伏しく。霎時頭式擡ゟゟ。屢ゟ暴道ゟのゟ。敵、寡兵ゟゟゟ。ゟて戦ゟゟ式ハ利ゟ。某この義をゟめゟ式ゟく龍城せんとのゟゟゟ時夏ゟゟ引ゟゟく過言式吐ゟく同士撃ゟゟゟ。式光景ゟゟゟ大早の兵ゟゟ時夏ゟ荷擔しく勢ひ制ゟゟゟ。某已ゟ式ゟゟ軍議を枉く云云ゟ計ゟく。百餘騎を留ゟく城式守ゟゟ時夏ゟ三百騎を授く。敵ゟ談ゟ式ゟて某ハ亦百餘騎を

ゐく。龍蛇茂林ニ埋伏シ敵の追過るを及て急ニ起さゝ一挟ミ揉合せて擊んとゝ麾ゆ[illegible]ゝ内応のものゝ敵ゝや伏兵あるを知て。そゝのけゝく背より。茂林ニ火を放てけ[illegible]ば射ゝ竟ニうち負て四百餘騎の軍兵ハ大ゝ[illegible]ゝ擊れて。某ハ辛ゝく。一方の圍を殺披て鎮守府の城ニ入ゝんとするニ誰ゝ[illegible]ば信夫荘司ゝ殘黨ニ府城ニ追落されて。敵入ゝるまゝ寄著にとゝめて殘兵ゝ擊ゝ時夏某縛ニ二人追來る。敵ハ砍散ゝく。ゝゝゝく恙なきをゝ。時夏ハ衍れて。不慮の敗軍迷恨ニ堪ずその罪萬死ニ當るとゝ願ゝ他日軍功をゝく外ロを贖ひ奉ん恩免あらば再生の歓びゝそゝへと。卿ゝく勸解ニけり。經任これを笑あゝど。勃然として声をゝり立ゝ暴道汝ハ一城を領ゝその軍令行ゝど副將時夏ニ怒ハ[illegible]ゝ欲居ゝく[illegible]ゝ敵と攻ゝその謀ニ陷らゝ戰の兵を亡ゝく。賊城を攻落さゝ何の面目ありて逃ゝく來ゝる又時夏奴ハ罪ゝ[illegible]重ゝ。汝ハ副將ゝ[illegible]ゝ。我意城徐みて叩ニ出ゝく戰んと欲ゝ已を過ゝ人を謬ゝ寔ニ嗚呼の白物ゝり。ゝゝ必貳ゝゝ敵ニ内応ゝゝゝん今ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ厨ゝゝゝ兵粮の故ゝゝゝて燒ゝゝ亦這奴ゝ所行ゝゝゝ大床の下ニ引居ニ。ゝゝゝゝ刑罪せゝゝこの熱腸を冷ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ刀を引提ゝく立んとゝ[illegible]を鬼六猛虎勝と進めゝく隔てゝ推ゝ。時夏ニ怒ゝ恣ゝ尤輕ゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ渠ゝ敵ニ内應せゝ死ゝ犯ゝく阿容ゝゝ。逃ゝくゝまで來ゝゝゝゝ鎮守府の城ニ入ゝく。敵ニ勸賞を[illegible]ゝゝゝゝゝゝゝ脫ゝ

べし。路はあくねど前年の功ふ顧て。且く一命を助めよ。他日大功あらんと。
今の罪を贖せ。人是莫大の恩澤なり。敵を境に置ざる躬方の
大将を殺さん不吉なるべし。枉て免させ給へと。辞せらるべく諫めけり。
浩然ふ鎮守府の城を攻落さまく終ふ心死を脱さ。こは賊元十
人許。大床の下なぐ来り城戸四郎武詮ふ計らるべし。その夜の夏の
為体を明る地に報ずべ経任仲なく怒ふ勝ざるなく哮狂ふふ。鬼
六々矢藤五ふ目を注ずべ矢藤五も亦辞を竭して暴道なる
賠詰。鬼六ハ復時夏が為ふ勧解て。共侶ふ諫ずべ経任も漸狂ひ疲
れて。袒の上ふ磯と坐。爰時疾視て息絶吻死彼も此も恥ずべや。
よふ赦ざる奴原なくねど。人の諫も黙止ざるべ。さべれ衆人の視懲る時
夏奴ハ雑兵の中へ追降て。水代汲せ風爐を焼せよ暴道へ宿所ふ退て。

佶と慎ることを。ふ嚴ふ命掟て。軍ふ伴の両賊を追退け。憤ふ堪ざり
けん俄頃に出陣の部ずべく府城を攻んと議る程ふ鬼六矢藤五五十五
六ふ齊一とれを諫ていへり。敵ハ初度の戦ひふ。十二分ふ捷て新隊も
ましや加ふ。ましんに鋭氣且く當るべ。只その懈るを候て攻撃ふ。
一挙ずべく城を拔べ。今攻ふ尚早ずとその理り成難ずべ経任有理と宜ひ
ずべ敵の虚実を探ずべく間諜者を鎮守府へ遣ずべ。又珍浦五十五六を
三百騎ず将ずべく泉川のもとふ備させ敵ずべ来ずべ。とく告ずべ命
じけるかずべ。程ふ一日鎮守府へ遣せず。間諜者走り帰りて。府城ふ
新隊鞏加りて。その勢ずべ前ふ三倍せり。これゆえ光仲ハ又本柵と攻んと
欲て。御用心ゆと告ずるふ又その次の日ハ五十五六が使泉川より馬ふ鞭
走ずべ。光仲既ふ一千餘騎を率て。泉川をうち渉り水を背ふて。備と

立てり。先鋒ハ如此こそあり。中軍後陣ハ箇様にこと喘こ告しゝば経任仲ゝく冷笑ひ大約兵を行ふ。水よあふとゝハ川を前ゝく備を立敵その川を渡ることゝ中流ゝくこゝを擊是兵法の要領ちゝふ光仲今水を背ゝく陣せゝハ是韓信が囊沙背水の陣ふ倣ふのゝゝり遮莫これみづゝ駈向ゝく擊散し前日暴道ふゞ恥を雪んゝくとゝひけゝく。鎧一縮しく馬ふうち乗り衆皆續けといそぐせば鬼六矢藤五左右ふ備く。芋らぬ賊兵千五百騎。みゝ後まで。と馳ゝうけ再説光仲の一千餘騎泉川をうち渡しく前面を佶と見ゝさせば川原幅ゝ距て五六町ゆゝく賊軍僅ふ三四百騎猶を唯羽ふ衝並く。射て落さんと扣ゝう。寄ゝ乃先鋒武詮昌之ハちゝとゝ小ゝ勇士ちゝ呼べとれを見ゝく養を捺ア大將の下知を俟ふ光仲先鋒ふ使を立く賊きゝひしふ似ゞ寡兵ゝう。見かゝうゞ誅あゝんそのとゝろしく試こゝくと促せば武詮昌之一議ふ及ばゞ。敵しく士卒を進めそ乃勢九三百騎鯨波を齊一揚く珍浦五十五六ゞ一軍へ面も背らゞ突蒐り。射ゞゞも擊ゞゞも物ともせゞ嘯叫く攻立まゞば。賊兵ふハ色めゝ紊れく引退んとゝる程ゝ賊首経任大軍と共ゞ平泉こう復来ゝ彼擊散せこ命叫べ神井鬼六鐵猶矢藤五八百餘騎を二隊ふ分ゝ寄ゝの先鋒三百騎を推包く擊んとゝるふ寄ゝも亦これを見ゝく佐味竺内。下河邊高吉ふ四百餘騎の士卒を進めく蔦直こ拉留めゝ勢しく戰へゞも賊將鬼六矢藤五ハヨ勢をこのこて些も猶豫せゞ馬上ふ鋒を振閃して騎繞こ賊兵ふ成罵將矢しく再三こゞび搽ゝうけゝば五十五六ゞ二百騎。これふ氣を沼く盛えし。武詮昌之ふゞ一軍と入紊れつく戰ふ程ふ経任も亦七百餘騎の賊兵を潮の盈ゞゞく推出しく光仲の本陣へ咄と

嘯く擊て蒐るに光仲士卒を進めく陽に開き陰に閉ぢ諸葛が八陣李靖が五法秘術を盡しく挑戰ふ矢叫の声天を驚め馬蹄の音ハ地を動しく擊つ擊るに追ひ返しつ引ぎ上ふ隙ハあらけて當下光仲麾ひ揮て賊を大軍あり原是烏合の奴原あり御方ハ背ふ大河あり退くと云ハ水ふ溺るるん進めくと下知をなに士卒ふ勇を奮ふく殘員を推除死骸を踏踰千騎が一騎ふ為ぞ

ふを去ぬと攻立るに經任が千八百騎その鋒ふ辟易しく為ぬ間

靡くふ城戸水草佐味下河邊の四勇士ふ驚破賊軍ハ崩立り今經任を擊捕るに何の時を期ぞと呼ふ馳ちがへく千変萬化と戰へば賊軍ふく乱れ立て擊てめ少くまで摠敗軍と云へるふ賊首經任些も驍ぐど鞍壺ふ突立あがりて金ふる劍を額ふ翳し口ふ

呪文を唱るに怪しむべし一朶の魔雲陰こりて經任が背のくより立仲ぞ蒼天ふ布満つ四面晦暝して咫尺を辨ぜ風又颯と来て沙を飛し樹を倒し電閃ふく雷の鳴ると凄しく耳を貫き光ふ射るく寄るの士卒悍しとのくどの進んと為ふ進れど退んと為ふ前後ふ迷ふく忙然る前面より珍浦五十五六左右より鬼六矢藤五衆賊を進めく射くる箭ハ電光ふ為ぬ敵く經任が一軍も亦十字ふ蒐ちしく光仲を引拘ふ呼る声も高くれども敵ハ何処ふあるとも沒ふぬ寄ふハ馬ふ驚死乱れて譬べ宿鳥の鏑を如く雜兵鞍敷ふく皆脱るんと打揮せり之の時光仲声をふり立いのひの死人この挙動ふ賊ふ幻術ふ為ハ豫て

ふり雪く所ふ為ぞ只光仲が殿ふ跟く圍を出ふと諭しんこの日も

陣中ハ携る。雷上動の弓を取る。うち念じて馬上ゐながら
蟇目の射法弓強を三つびうち鳴せば現名弓の徳怨ど候忽霊
散風凪て舊の白晝ハあらまほけり。経任ハ呪術を折れられどゆ。
撓まぬ。頻ハ衆賊を駈立て。為ハ光仲弦撃ん時を見のミあるで
鬼六矢藤五五十五六ハの三賊将四方八面より推て巻き。
横矢背箭ハ射てけまべ。寄手ハ備を立てハ隙
て武註昌之ハ賊の矢面に立塞りて。
先途と防戦ひ高利高吉ハ一方の
囲を突破りて大将を扶引て。
且戦ひ且走まく泉
川をうち渡れば。

賊の大軍透間もなく追蒐うて。されば引後まする雑兵ハ水中ゑ追落されて。底の水屑となるもの多く。然らねば河原ゑ砍仆されて。沙石ゑ骸を埋るもの少なからず。されども光仲ハ佐味下河邊城戸。水草の四將と共ゑ残兵を招く。悉く向の岸ゑ馬弐乗揚鎮守府と投て退く程ゑ経任ハ長く駈て。これを追ふて甚急なり。かゝれば光仲ハ走る御方の士卒を是首ゑ俟。彼首ゑ聚く既ゑ府城ゑ近く程ゑ廣綱ハ城搜より。遥ゑ三百餘騎を配出させ援く御方を引揚うとされば群ごち追蒐き来る賊の大軍徒ゑ城を盟て。跟ハゑせざる残悔と罵るのミ就中経任ハ空く遺恨ゑ堪ず。敵ゑ膳病神の離ず間ゑ攻落せと焦燥く稲麻の如く城を囲て昏夜を攻こゝ。

中輯第二十四　　邪を祛る妙藥方

類と賊ふ　犬奸計

泉川の敗軍ゑ佐味下河邊城戸水草の諸將ハ各ゑ雑兵ゑ至て。痛く疲弊ぬハ稀なれども。光仲廣綱の恩を感じ義を重んじ。聊も疲労を告ず。城中五百の健兵ともゑ。おのく持口を受とりて防戦ハ。ざるものゝ。されば賊の大軍蟻の如く斬を進ず。塀ゑ著て攻撃こと間なけれども。城中弱る氣色なく。術をかゝく。禦ぐこと十日ゑ。ゑ及ぶ。しかば。経任ハ。倦労まく。この城急ゆハ落べくも。且く兵を退けく。遠巻ゆく日を送ば。城中竟ゑ兵粮竭ん。然らば野心のものゝ。そのこれ急ゑ拉ば。鑿ゑ。つべくこれ。さいとく。躰く旨を偽く。攻口を緩退け。城を。こと。數町ゑ。城中の通路を断塞。滕澤の社の南

こゝに泉の里のこゝまで。鞍陣営を結構く。遠攻ゆぞ者こうけるこゝろ
どゝ城中ゆい防禦ゆふく間断ゆく。光仲へ廣綱と力ゆるくゆこゝ
ゆ員を勦り。急ゆの紙燭し。泉川ゆく鞍ゆ一士卒のその妻その子を
憐ゆく。のと懇切ゆ扶持しこゝ。とく程ゆ光仲へいぬる日の戦ひゆ聊矢
傷紙員こゝ。ゆ日数經ゆて腫痛と破傷風ゆこゝ。遂ゆ帳
中ゆぞ卧たりけゝ。士卒ハこれゆ驚死憂ゆく。おのく頭を病しつ。大将の
本復を。禱ぞゆんこゝけゝ。さゆ程ゆ賊の陣ゆ一夕。神井鬼六猛虎
夜行しく。一個の行客を捕捕て。躰く賊卒ゆこれを牽しくこゝ。
經任ゆ告てのゆこゝ。某今夜夜行して怪しゑ行客と生拘こゝ。その為
体全く遠方こゝ来ゆるゆゆゆ。潜ぞゆるゆゆと云へば。
その来歴を責問しゆ彼ゆの遂ゆ陳ゆく云ゆこれハ廣綱ゆ家臣ゆしく海老

尾加世丸と呼ゆゆ城ゆこゝ。潜ぞゆこゝ。泉川ゆゆ戦ひゆ大将光仲
矢傷紙員ゆく。破傷風ゆこゝ既ゆ是危窮の症ゆ廣綱ゆ且ゆ
憂ゆ程ゆ或人のいゆく。この陸奥の國府ゆハ云云の良醫ゆこゝ。
ゆく迎ゆこゝ。そゆ療治ゆ任しゆ。平愈速ゆこゝとのこゝ。こゝて廣綱ゆこゝ
命ゆく國府の良醫を召んと欲ゆこゝ。運微しく見舞ゆこゝ。夏の
ゆゆ及ぶとのこゝ。計ひゆこゝ。と問れく經任頭を傾け莞然と笑く。
こゝ点頭。こゝゆを生拘こゝ。ゆを且おのゆこゝ処分ゆこゝ。とく牽居こゝ
いゆこゝ。端近こゝ立ゆく床九ゆ尻を掛る程ゆ鬼六ハ加世丸と貴子の
下ゆ推居こゝ。當下經任ハ左右ゆ命しく。加世丸が縛を釋敬さ廷貴子
の上ゆ召のぼしく。衷詐の言語を順げ。廣綱が家臣ゆ海老尾加世丸
こゝ汝ゆゆ欲汝ハ光仲が為ゆ城と生く國府ゆ良醫を徴ゆこゝ。

そなるもありやなどと問へば加世丸答へて然りとのみ經任左右を見入りて。
その賓客より物貨取せよとて。といそがせば豫てそなへおきたる一個の
賊卒奥より出て。沙金を折敷に積て差出せば加世
丸は呆果て。いと色なきまでに引もぎ遂巡のあまりて
けるとぞ經任呵々として笑ひ加世丸そはるかに志を疑ひ受納よ
汝ら人態嗚呼しげあるとも大剛のものなるぞ大軍の囲を犯
て。國府へ赴くに成せんやその忠勇を感ずるあまり汝を殺さず
忍びて心を改めくれよ仕へよ富貴歡楽自在なるべしと加世
丸頭を拊て某既に生拘られて暫く屠所の羊釜中の魚なり再生べき
恩ざりしに一命を助けられて鞍の禄を賜ひ賜石使んと仰せらるる是
塞翁が馬にして禍変して福となるべしと欣びとまどふ色なり

席を避て肘を張て空を仰ぎ目をまばたきもせず但瀬蝦蟇の這ふ如く
敬て赤心を示せば賊ちのく笑ひを忍びて嗚呼の者ども
ありけり。かくて經任は加世丸を陣中に留め毎日に美酒佳殽を
飽かぞふ歎待せ今は賊兵を退けて獨加世丸を側親く招き汝は廣綱に使れ一日と
今日まで仕へ熟る樂しき明け地の意中を知せよ城中へ帰去
らんとあらば還し遣まべし汝ごとき小兒ども何せ
とて廣綱の某廣綱の仕へ一日も一碗の
蔬菜さへ美く食ふに成ざるを捕れて此陣へ来り
日より昏は美食に飽夜は温に臥て王公貴人の栄華に成りこの
楽を今さら棄て豆の日も憑ぐべき府城へ還ぐべき然鴻恩を

受たまはりし。その報ひなすに由なし。用ひらるゝ事もあらバ。二なき命も惜とせじ。只報恩をおもふの外に他念ハあらずと。回答をきけれバ經任ハ。こゝろよげにうち領き。さらバ汝をたのまん。やゝ有て所偽なくハ是に一計あり。その計畧ハ別議にあらず。陣中に悪別當訥原といふ塞修驗あり。是年来我に仕て膂力強く膽太し。汝ハ彼訥原を伴ふて。今夜府城へ立入り。國府より某甲といふ名醫を迎来りしと偽りて。渠と光仲が病床へ進めよ。その時訥原ハ光仲が脈を診るやうにて。推伏せて刺殺さん。汝ハ城に火を放て。事乃紛れに城門を開き給ひ。我ハその煙の昇るを見バ。短兵急に推寄て。立地に城を落さん。事成らバ汝が功ハ四首領の次に居らしむ。賞禄ハ乞に依てあたへん。よくこの事行んやと。問バ加世丸一議におよバず。そ

大役に侍れども又なしがたき事ありとぞ。某原ハ俳優人なく黄獨乃譜第にあらねど。且その恩義ハ浅からねども有繫に故主のよしみあれバ。そはさていかでか殺せとあらバ。聊難義乃助ありといへども。光仲ハ我が主君に申さん。それのみならず彼人ハ月来の思ひあり。それがし黄獨乃息女且見姫に某懸想しけるに。いまだ本意を遂ずして光仲に妻され。胸に焼火の浅間山富士の煙の雲となり雨となる人の樂みを見るに思へども及ばぬ恋と身を責て。思ひ絶ても怨みあり。彼人の為に城を出て。國府に良質を徴して。分貸らし主命をもて朽をして思ひつきぬ怨をも殺さん。今の御諚ハ常言にいふ痩鬼しく讐を報まで類にする願ひても難き幸ひなれバ。左も右もあらばこそ。刺客の導をなしつゝやらんそれゆへなれバ。安かれと意趣さへ告て兼引受るぞ。經任大きに歓びて。訥原怨によハ

立まべ阿と仏く。烏髪の賊僧裡ろう垂る幕を掲ち。傀儡の如く見れ出る弐加世丸ち年ろ人まべ齢ハ四十許ろべく眼圓ゐ色黒く。厚累の草乃身甲しく。朽葉色の大袖ゐ綾の銷金の輪袈裟弐掛。白拓の帯弐前ゐ締て朱鞘の大刀を跨る一癖あるべ死面魂向ねど某と名れろ。當下経任ハ訥原弐傍ゐ付ろせ加世丸。ほまハ今ゆべ。ほる悪別當訥原ろり。けんろとしてハ狗と鷹ゐ狩場ゐ赴くゐまべ必隈ろく謀し合せよ。彼密策を豫てトろ。この山伏ゐハ示しとのゐゐ西人とろ弐沼く迷ゐ名告り。向後弐契ろ。ほとく笑坪の會ゐそゐ中ろけ。ろく程ゐその日も既ゐ暮しゐ訥原ハ國府より来れる醫師のよく打扮く。假ゐ行裝を整ひ。鍼嚢を懐ゐし。藥籠を腰ゐ。加世丸と共侶ゐ鎮守府の城ゐ赴けべ經任ハ鬼六。

矢藤五五十五六ホの賊将ホ件の謀を説示し。俄頃ホ城攻の分配して。馬ホ鞍を置せ人ホ兵粮を食ハ。城中ホ火の發る迄ハ瞬間ホ推寄て攻落せとぞ徇ふりける。かくて経任ハ弓や時刻ホ到るまでハ鐵猪矢藤五ホ賊卒五百名を授て陣営を成らせ。己れ身ハ鬼六五十五六ホの偽将と共ホ千二三百騎を將く。徐ホ府城ヨ近著ハ加世丸が暗號を俟ホ城の正門の左ホ當て猛火忽然と燃上り城内ヨ罵り騒く声いと遠しく聞えしハ驚破暗號を違へそと衆賊を進め闇を發し真先ヨ馬を馳て。東の城門ホ攻蒐るホ内ヨ扉を開くのあと。経任ハ其ヨ就て。欣然として些ホ擬議せず鬼六五十五六共侶ホ會釋もなく騎ハ。その隊の賊軍七八百。みな後ヨ。と迄入て。と云ふ間敵ハ一騎も在ず。原来謀ホ陷て退ぞと散動く程ホ雷鼓忽然と鳴ぬく鼓こと耳を貫ぬ左隊の。こと間中守直右隊の。こと下河邊高吉二隊の軍兵齊一起て射る矢間ハ各蝟の如く。前ホ立こと賊兵を矢庭ヨ七八騎射て落せば賊軍いよく驚死靡ぬく。戦んとする擬勢なく。進退殆度を失ふそぶ前面ヨ加世丸ハ悪別當訥愿が首を刀尖ホ串なつく一隊の兵を率ひ。あらはき出逆賊経任と其ヨ成ヨ。こと賀殿の密策をうけ。夜賊將鬼六ホ生拘ふ是ハ是苦肉の計略なり遂ホ沒を計課せて。ねく来ふる訥愿ハ既ホ刑罰せ。こと虎狼も慾ヨ迷へ。こを欺き虚こと城ホ入りしハ夏山の照射ホ似る自業自得天罰かくの如くホ。べ。戈を伏る成束く縛を受こと呼ぶべ経任ハ己れを怒まで怒る面色烈火の如く馬上ホ戈をとり伸く加世丸を刺んとする。退ぬんと打擇

さるる裏賊馬前ゐ立騒げハ一歩も進むべくもあらぬ左右ゐ備を立ん
とすれば馬屯陜うして今さらゐ指揮もべくもを憑切るる鬼六五十五六ゐの
賊将を間中下河邊の両軍と戦んと欲すれども崩れて崩れて出んと
する賊卒ゐ誘はれて鶴翼の隅ゐ推著らるるゐを術なきもべ
路を開けと叫ぶの隊兵鞍討まて経任を見久りてかくてを終でら
かるのべ雲を喚び風を起し事の紛るゐ退れ出て又戦はめとありしを
戈を乗て剣を引抜れ口ゐ呪文を唱れば雲四邊より陰こと雲起らん
ける程ゐ二の城門をさと開せ玉ヨヌ賀藏人光仲ハ賀綱高利共倍ゐ
一隊の軍兵を率て突出し経任を目ゐ向けて雷上動の弓を引て前續
早ゐ射をけるさまべその馬前ゐる賊兵ゐ紛こと射仆されて起らんと
せし雲ハ散て吹んとする風も消起ぬ霊弓の徳再び見て経任が幻術の

行まさりけるべ頻りゐ遠く躬方の上を乗越て影を暗し脱ゐ出べ
そぐ後ゐ跟て鬼六五十五六賊兵もて後れじとそ推て推れて輾て轉て卒
くして逃出ぬ雲ハ後ゐ入て後ゐて賊兵も駆外面ゐ来て
入らんとするの勢ゐて彼れよ推あて突倒さと蹂躙らと
て引て寄て罵騒ぐそぐ背ゐるも守直高吉軍兵を駈進めて漏
さじと撃程ゐ正門の橋のほとりゐて撃て賊卒亦ヨヌ乱れその際ゐ経
任ハ鬼六五十五六と共ゐ四五百騎の残兵を率て舊の陣営と投て退くを
追留て撃んとて光仲ぶて士卒を引率て城を出て戦追蒐又
廣綱ハ留て守直加世丸とその隊の兵を分部して前後の城門を
守護せしめ又五百騎ゐ将て此の霄陣営を戍て鐵箭矢藤
五重連ハ遥ゐ府城の戍ゐ彼暗騎の火ハ滅て矢叫鯨波

のゝぞいとも幽ふ覆へ〜ゞ扨ハ内応のものゝ為損じく。躬方ハ城ふとり籠らゞ戦ひ難義ゝ及ぶの欤疾拵ぎゞ失あらんさゝそ賊卒百餘名と遺ーゞ多く陣門を守らせ。ゝゞ勇ハ四百餘騎を率く馳て府城ふ近付く程ふ経任ハ大や四五百騎ふ撃ゝ合ゝて鬼六五十五六ふと共ゝ多く必死を脱まゝ。ゝゞく後方を見ゝれバ光仲の大軍潮の盈ぎゞく追蒐ゝと甚急ゝり。かゝてハ陣所ゝでも退せゞ。踏駐りて戦ふゞ死欤脱ゝ程ハ走ゞ死欤と思ひゝ多く只曾ふ疲労ー馬ふ鞭ゝ浩処ふ泉のゝゝゝ。鐵猶矢藤五援来ゝ。新隊の弓ゝ武直と備て殿ゝゞ引く中く。光仲ハこゝ武ゝく。先隊の大将高吉ふゝ速ゝ賊ゝ逼りゝ。只緩ゝふ追ゝべ。と下知して使を走せけゝる程ゝ経任ハゝゝも鐵猶矢藤五ふゞ援ゝゝ武ゝく大死ふ欤び衆賊齊一陣所ふ還て。

備を立んとゝる程ふ忽地陣門の背ゝり。猛火煽こと燃盛ゝ。敵の軍兵突出ー二騎の大将左右ふゝゝく真先ゝ馬武跳らせ逆賊経任ゝゞ死ゞや。ゝゝと多賀殿の武畧ふ役ひ甲夜ゝり竊ふ城を出ゝ。この陣門ふ去のび近づ死援の賊兵出ゝくまふく。ゝゝゝその便武ゝて。遺ゝ田ゝ奴原を或ハ撃ゝり。或ハ生拘ゝ。ゝひの隨ふ入ゝゝく。汝をゝふ俟ゝ久ー。かゝふの武誰ゝゝ信夫荘司の舊臣ふゝ。ゝのあゝと知ゝゝゝ城戸四郎武詮ゝり。水草太郎五昌之ゝり双ゝ受ゝと喚ゝく。猛火の下ゝり撃ゝて蒐ゝゞ芬らぬ軍兵三百名咄と嗤て難立突伏せ勇を奮て攻ゝける。神出鬼没の伏兵ふ経任再び驚ゝく。備を立ふ暇ゝく。鬼六ゝ何処ふゝる。矢藤五五十五六ゝく。ゝゝ彼蹴ちゝせゝ。ゝれゞ乱ゝ立ゝり癖ゝゝゞ悍死ゝ怯ゝるのゝ僉陣門ゝり

逃出ぶ光仲の先鋒高利高吉士卒を進めく追蒐ふ前後より
さ〜挾くいとゝるいく攻撃ふぞ又撃ふくの少ゝもぞもちろんあとども
経任ゝ三騎の賊将と力を勢しく稍一方を殺開ん平泉のゝ〜逃奔
ぶ城戸水草下河邊ホ蓬し返せと呼みく齊一ニ戎追ふ程ホ既ホ
ちく経任ホハ泉川きぐ落延ん馬をさと乗入ぶ河水忽地左右ヨ
ゝ〜陸地をゆくホ異ゝもぞ従ふ賊将賊卒も皆その迹と蹈程に
輙く川を渡〜く〜ん活処ホ追隊の軍兵むゝくと走ふく早雄の士卒
七八名中のゝ涸〜水をぢ戎渡〜ゝぶ忽然と河水ゝろホ落あて件
の士卒を流〜ん當下武詮昌之ホハ高吉ともホ追蒐ふく士卒の
溺ん戎ゝる抱ん流急けぶ救ふヨ由ホ河水霎時中絶〜ハ是ゝぞ
経任が幻術ゝんと思ふぞ左右ゝ入ぶぞ向の岸を疾視てゝ〜ぶ

其処ホ不行ん。かゝ〜程ホ光仲ハ佐味高利を先ホ立〜く備を乱さぶ
士卒を進めく泉川の上まぐ来ぶ高吉ホハ経任が幻術ホ〜ん魅
兵を溺ら〜且舩ゝ渡〜ぐく賊を走〜ゝ戎告く俄頃ホ近邊
ゝ竹木を伐ゝ〜く筏を造ゝんとゝを光仲ゝて推禁め窮寇ハ
追ふべゝぞ今経任ぶ首を獲ぞ天誅ゝ〜ん久〜ぶ且くゝゝホ
天を明〜く川を渡ゝ〜ゝ遅ゝホゝ彼此ヨ散在せる士卒をゝ〜く
集合ゝそ。ぶく揚螺戎吹ゝせホけぶ衆皆本陣ホ聚ゝく討
ゝゝる首ども戎實撿ヨ入ぶゝれども名ある賊将の首級ハゝぞ凡此度の
軍功ハ加世丸ホ勝めゝ〜く光仲ゝその詰朝使を城中へ遣〜ゝ渠ホ
感状をぞ与へけるかく〜次の日光仲ハ平泉へ寄せん〜く頃日経任が退け
隠せ〜船敷求ゝ出さ〜く泉川をゝち渡ゝホ彼此の郷士野武士ゝまぞ〜さのかの

提軍を伐ん仕のく。縁を徴め名簿を呈し。走加るゆの多ゆ之多ゆ又千五百餘騎ふるゆまぬ即さの多ゆ三隊ふ[illegible]ちく平泉へ寄ほるふ及ぶく。光仲諸將と軍議そらく。塹を踰塀を毀く急ふ柵を破ゆんと。賊ハ必死と思へ決めて一致しく禦ぐゆるべし。ゆゆべ柵を破ると。ゆふとも御方も過半傷損せん欠さぞハ軍ふ勝とも功かし。経任さのふの戰ひふ同類戎戰擊せく陣中ゆる兵粮さえ皆燒亡ぬゆる。ゆ物いまぞ之かゆべくもあらぞ且搖籠る賊兵も猶千餘騎ハあゆんぞゆん曩ゆへるぶ軍敗れて賊ふ追ぬく城ゆ籠りけゆへ亦賊と追ふく。進ゆく柵を攻んと欲を戎ハ主とゆう客とゆる勝負を未然ゆ決めぞし。只三方より遠巻ふしく。犄角の勢ひ張るべし。かく夜ハ鉦鼓を鳴らし。鯨波を揚をもく攻ぬんと。ゆるぞくふせば賊ゆ昏夜の防禦ふ疲労く懈るゆヨヌゆん労るゆヨヌ

怨戎生し。懈るゆヨヌ戎を失ふ是必然の勢ひ。これその虚ふ乘しく攻撃ばハ一戦ふ柵を拔くべし。且平泉の柵ゆ昔藤原秀衡みぞゆゆ工夫の縄張ゆしく究竟の要害ゆり。と伐ん仕ゆしぶ果しく違ハず。ゆし軍令ふ隨ゆぞ。拔菟ゆるゆハ斬ら。ゆのく陣営をしゆ固めく朝掛夜擊の用心せよ。一人の怠慢ハ千五百騎の命ふ係ゆう敵と侮るべゆゆと嚴ふ告掟ゆ。柵を距ゆると数町ゆしく堅固ゆ陣を布ゆし。且遠攻ゆぞゆゆるゆ。されば又修羅五郎経任ハ三個の賊將と共ゆ。残兵を率ゆく平泉の柵ふ逃籠る。ゆゆ賊兵五六百名ゆ。加之。討漏さゆれしゆる賊卒ふ五騎十騎ゆく還聚ゆ。無慮千餘騎ふゆ。ゆうち員ゆ且ども氣を屈せぞ鬼六。五十五六矢藤五ふの賊將ふ攻口を固めゆ防禦の軍配懈

らるゝ毎日ふみづくり城楼ふ登りて寄手の陣を見こしこゝふ一日一の関のあるこゝろもと一隊の軍兵出来まり。経任も安くこゝ成こんく。又遠眼鏡をとり直し。はるくとうち見るふ紛ふべくもあらぬ躬方の兵あやまけまゝ腰裏ふ忍ふ。彼ハ跖犬吠又が先度の敗軍の告ふ。こゝまふ力を添んとく。厨川ゆくの兵をはるく来りこゝん。あろれども彼軍勢弐推まるふ五百騎ふ過ざるべし。緩こゝ士卒を出しく。助けく柵へ入まんとぞ寄手の奴原遮留あく。変の難義ふ及ん欲せんまゝあやまと劔を引抜元霎時呪文を唱まゝ霎々とく雲起て。柵中柵外忽地ふ。野干玉の烏夜とゝ成これく。黒白も別ぎありしゝゝ吠又これよ便り成ゝく。紫内知らまゝ闇ふも迷ゝ後門ふ。軍勢を繰入まけり。寄手も絶これをあゝぞ。

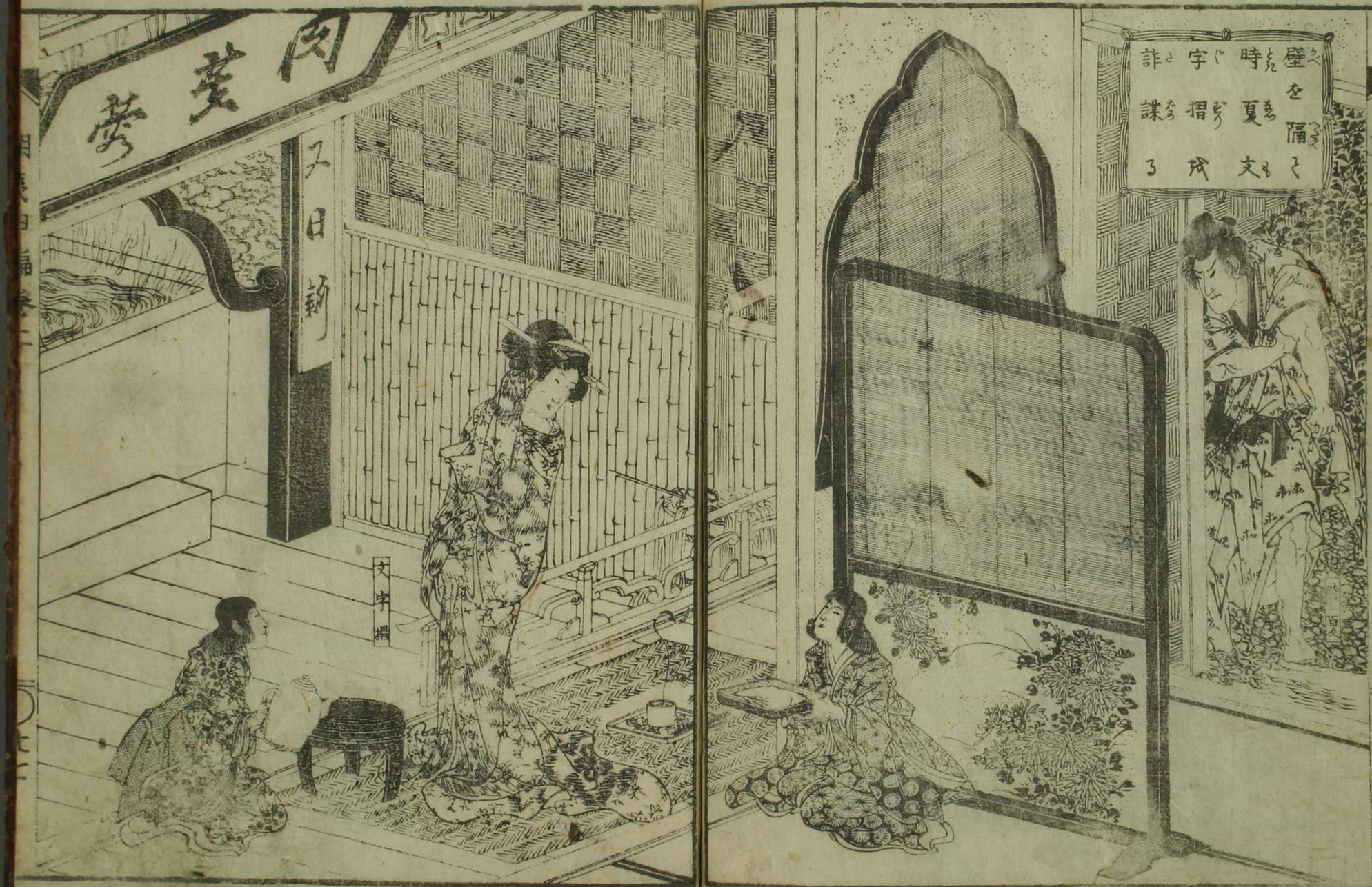
時を未の下刻あるふ俄頃ふ暗くるもしゝゝ。こも経任が呼約あれく。撃くゝ出ん為なるゝ。遮莫雷上動の霊弓あまゝ。おそるくふ足らこゝ。出ハ撃んと掌柄膏引く。士卒齊一候しゝど賊も一騎も出ふ。且くしく空霽けて。後ふ只光仲のみ経任が彼幻術も加勢の賊兵を引入くゝ為こゝんと稍曉あくく。士卒ふ云云と示しつく。事情をゝるこゝまゝ皆悔しくぞゝる。こゝ程よ経任ハ吠又が加勢と合しく。千五六百騎ふあるこゝしゝゝ敵を侮まゝ。ゝろ驕りく遂ふこんゝ衆賊を指揮せゝ。ゝまゝ弐陥むめのあまゝ誇貌ふ示まゝ。ゝらぬや光仲ハ。ゝろ術こ害怕くゝ只遠巻ふゝるこゝ絶く一遍も柵を攻ゝ親あゝく時日を過さゝ渠かゝ兵粮竭ん退元去こんと欲ゝゝ元。柵よりゝ一度ふ殺出ゝゝ一撃しく光仲を撃こゝんと疑ひかし。さゝこ

労をもとらんとて。鬼六矢藤五吠又五十五六ホ攻口を守らせ給へ。
身は帳臺の下ホ引籠て。彼文字搨及鞍の美女を聚合て。淫酒乃
為ホ愚ひを忘れて。歌舞郢曲ホ夜を曉し。又あらぬ死ハ獄舍より。
義邦を牽出さして。ちまた或庭前ヨ責鞭せ。笹姫ホ説勸めく。ヨホ
隨せうと催促をその他一毫も意ホ違ふものあるべ立地ホ砍殺し。その
肉を殺ホ人ホ食せ。ヨまた食ひ。その残忍暴行ある。古ホも
今ホ。ためしなくをあるべ。るうの顔を背けり。不題蘇塗鶏東二
暴道ハ曩ホ敗軍の咎ホ。閉籠られて。程ホ経任漫ヨ
敵を侮て軍配を。諸將ヨ任して。酒宴遊興夜を日に續ぐ。淫樂を
のく夏ヨ。侍人少くして驚れ人ホ就き。狀を進めく。只管ホ諫
しば。経任ヨ或紋ぐ。然るを暴道ハ軍略智術ホ長るの

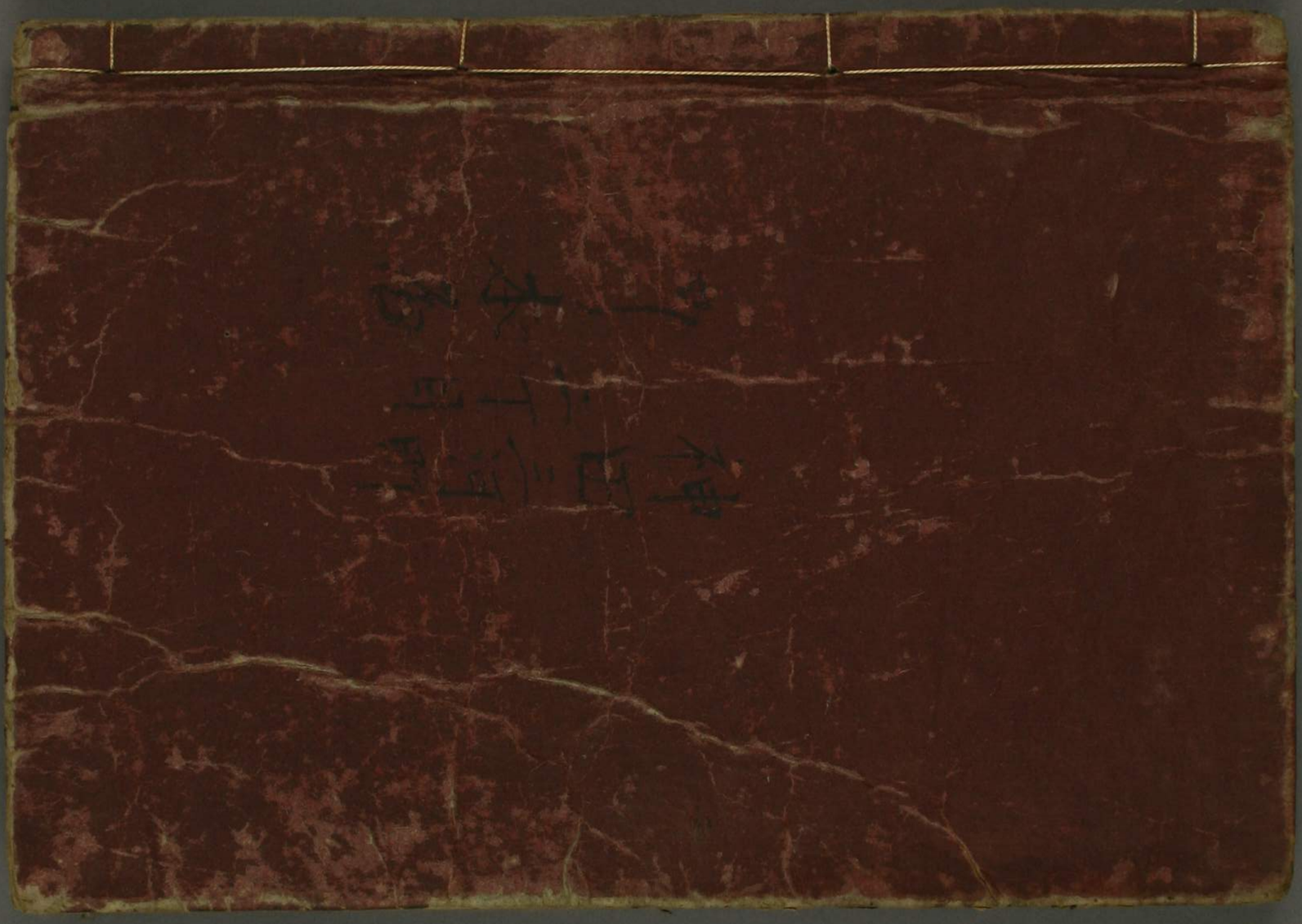
るを。渠を免しく召出し。舊のごく軍士ホせば寄ヨの兵粮竭るべ。
敵を退る計策なるべ。やハと思へども召出さば。屢「ヨ」と諫る
ようあるん。さでいとくうるさかるべ。暴道を用ひざるとも敵ホ克れぬ
とうとく。竟ホ諫を容ざりける。業下某生再説刀野太郎時夏ハ。
既ホ雑兵ヨ追降さまく。水を汲く風爐を燒きいくたくの日と送れ
ども。逃去らんハ。るべのるさるこの辱を忍ぶ。ばうく人のく恨く。
擂倩ホ。暴道已ク非を飾ヨく。龍蛇茂林の敗軍をこぶヨ
ものホ塗著ヨ。さればこそ這奴ハ。龍中ホ蟄らまくも安然とく
日を送る。ヨまた浴架の火燒鳥。尾羽うち濡く。啼ホも啼まず。又
文字搨奴も憎むべく。ヨるべ（ものるこの這奴ハ主ホ許さまてられと
衾を累くる情話の舌をも引ぐ。又さくホ主ヨ媚えんその後絶てあること

かゝ。そハ修羅殿の吝ゆく。一且ゴまふ与へしの紙又豪奪ゝく返さゞゆ。
ふあるまゝ。ゑるのゐまども。嗄児と主ふハ勝ゞゝ。ぬゝゝとゝもあれかくも
あまゝ。文字搨奴が薄情たゝらもゞハ偷びてもあゝゞあゝべ。ゝゝやゝゝゝゞで
ゆるゐゝゝゞとゝゝゴまハ今かゝるゞゐゝく。這奴ふゞ為ふ水銀汲ゝ毎日ふ
風爐を焼と知りゝ。渠ゴゞ為ふ主ふ勧解ゝく。一言半句の孰成をいハ
ゞゝハゆゝふゞゝゞ怨ハ件の両人ふあゝ。ゴまゝ文字搨をゐ殺ゝべく。暴道
をゝゝ殺ゝゝゞハ男子と生れゝ甲斐ハあゝゞゝゝゝゝ。かくやゝゝゝゝゝと
獨ゝゝゝ式苦ゝめゝ一両日と経ゝ程ふ謀をゆゝくゝゝゝゝゞ。その詰朝文
字搨ゞ浴ゝゝを窺ひけり。抑経任ゝ使ゝく婢女輩の浴室を張
堂の巽ふあゝ。七間の行廊二間の浴盤日ふ新ふゝく又日ふ新ゐゝと
欲ゝゝ美女ふ朝ゝ暮ゝまで入りかゝゝ立かゝゝ浴せゞゝゝあゝゞ

めゴど。文字搨ハ経任ゞ愛妾のゐゝゝあゝゞ。第一番と定らゝく。渠ゞ
浴せゞゝ程ハ入ゝめの絶くゐゝゝけり。ゐゝゝふ時夏ハ壁を隔て火を
焼くのゝ。文字搨をゴゝゝゝゝゝゝゴど第一番ゴ入ゝめハ渠ゐりけゝ。
と豫てゝゝ知ゝゝゝゝゞこの日も文字搨ハ肘ちふ召使ふ両三人乃
童女ふ浴禅風爐布肉衣をゆゝゝ。生平の如くゝゝゝゝゝゝ。
浴ゝゝ程ゴ時夏ゝく嗄ハ知ゝく。薪を添々嘆息し。痛ゝ允ゐふゝの
君の浴ゝけの式限ゴゐゝん欲ゝひゝく恙ゝくゝゝ終ゐゝ人ゴ計
らゝく。ぬゝふ飽ゝく大事ふ及ん。苟ふゝのゝゝ。偖老乃契
あゝゝゝゞゝ。末の松山波の越ゝゞく。主命ゐゝゞゞゞゞん恨ゝゝゝゝ
憎ゝゝと名ハぬ君ゞ為ふその仇人を告ふ出ゝ。最上の川ゴ使ふ鵜。
巳ゞ腹を肥さんとゝく人の為ふ鮎ゝゝ捉ゝ。みゞゝゝ誰と考へゝく。嗄ふゝ


壁を隔てゝ
時夏文字摺
詐謀る成
又日新
文字摺

傷ましきものひそと密かふひとりまがつ。諺ふ似る壁訴訟を文字揭聽く愛
とそてくいとひぶーく咎くども時夏ある且び石近づけく。みぐる所以を同ハ
べくもあるまじ。えーそあるめ。と咎ひる現逞ーれ淫女ある且ども情由あるー
人ふ外ぐる。ぐるーく紙ーものひるけるーく咎くどもさと赧めー。花の顏雪の
膚消ゆ。ぬぐれるちーる堪ぬ浴盤の湯烟ふ霧の中ある白蓮花彼
唇朝の揚大真が盧山ふあるぬ湯あぐるも果ハ馬塊のたるるぬ袖ゑ玉ある
汗を拭ーく。うち著ぬる衣の空燒の留奇南の熏ひと高れ紅ぐるの胸締。
むとびるあーぐ裳裾揭く。童女赤紙前ふ立後ふ立ーく。ちくちく音量れ
廊下屢ちのが局へいそぐーぬ畢竟時夏文字揭戎驚ーく又ゆるある說
話ある。そハ次の巻ふ解るくる紙ふんく。

朝夷巡嶋記全傳第四編巻之二終

吉田藏